

鹿屋体育大学生の職業未決定状態に関する一考察

本多美美子*, 范翔**, 金高宏文***, 竹下俊一****

A Study of the “Vocational Indecision State” of the National Institute of Fitness and Sports Students

Fumiko HONDA*, Xiang FAN**, Hirofumi KINTAKA***, Shunichi TAKESHITA****

Abstract

This study used the Vocational Indecision Scale (VIS) to analyze the job consciousness of 461 survey respondents majoring in “Integrated Sport Science” and “Budo” at the National Institute of Fitness & Sports in Kanoya through comparisons of gender and academic year. The survey administrated in the study included 39 items and considered the 6 factors of “Confusion”, “Immaturity”, “Easiness”, “Moratorium”, “Exploration” and “Decision”. Based on the respondent’s answers, this scale indicated the state of that person’s vocational indication. *Results of the testing chi square showed differences between gender, with female students more likely to exhibit obvious indicators in the area of Decision than male students.* Furthermore, the study showed significant results in the areas of Immaturity and/or Decision with respect to second and third year students.

The findings of this study suggest that in the National Institute of Fitness & Sports in Kanoya, female students, especially second and third year students, may have a stronger job consciousness and vocational decisiveness than male students. In conclusion, the results show that it will be important to review the university’s carrier program for students.

KEY WORDS : scale of vocational indecision state, job consciousness, carrier support, chi square test

背景と目的

鹿屋体育大学では、全学生の約6割が「保健体育科教員」を卒業後の職業として志望しているが、実際に教員として正規・非常勤採用される学生は2割程度と低い。学生が教員を志望する理由として、学校生活における教科学習のほか、クラブ・部活動および課外活動が大きく関わっていることが報告されている（藤原，2004）。もっといえば、中学・高校時代の恩師を理想像とし、部活動に関わることで自己の専門競技を継続したい、という理由から志望する学生も少なくない（立木，1998）。

本学は、平成22年度からの文部科学省による「大学生の就業力育成支援事業」の選定及び経費措置を受けたことにより、全学的な取組としてキャリア形成支援室を設立した。本事業の取組のひとつとして、学生が入学時より漠然としている職業観について、多様な業種への視野の拡大と方向付けを行い、職業選択の可能性を広げ、自主的に進路決定を促すことを目的にするとともに、カリキュラム編成や新規プログラム導入を実施・評価することがある。具体的にいえば、カリキュラムではキャリアデザインI（1年次生前期）、キャリア

* 鹿屋体育大学プロジェクト研究員

** 鹿屋体育大学大学院博士後期課程

*** 鹿屋体育大学スポーツ・武道実践科学系

**** 鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系

デザインⅡ（2年生後期）、キャリアセミナーおよび就職対策セミナー（3年生前期）を連携させることで、学生の職業に対する視野の拡大、進路決定を促すことを狙いとする。またプログラムでは、学内外におけるインターンシップによる就業疑似体験の実施や、就職ガイダンスによる外部講師やOB・OGからの情報収集の機会の設置を検討している。

だが、学生の職業観に対する視野の拡大、自主的な進路決定を促すようなカリキュラムおよびプログラムの導入、円滑な実施・評価には課題も挙げられる。三木・三波（2010）は、新たに構築されるキャリアプランニングプログラムは、学生が自らその重要性や必要性を認めることに意味があり、学生自身の将来にとって必要なことだと自覚して主体的に行動を起こすような働きかけを起こすことのできるよう、作成者は万全の準備・工夫を行わなければならないと指摘している。学生側に適した就職支援のためのカリキュラムおよびプログラムを提供していくためには、学生がどの程度職業に対して関心を示しているのかを把握することは重要である。

したがって、本研究では本学学生の職業に対する関心の程度を把握し、大学生の就業力育成事業に伴うカリキュラム編成や新規プログラム導入を円滑に推進するための一助とすることとした。なお、これまで本学では学生の職業に対する関心の程度についての把握はなされてこなかったことから、本研究は性別および入学年度別といった基礎的な対象者属性によって関心の程度に差が生じるかを検討することとした。

調査方法

1. 対象者

鹿屋体育大学に在籍する1年次生から3年次生までの学生461名に、集合調査法による調査を実施した。分析を行ううえで項目内に欠損値のない435名を対象とした（全学部生603名中の72.1%）。

2. 手続き

調査用紙は、1, 2年次生は各クラス担任から配布、3年次生にはゼミ担当教員から配布し、調査時期は2010年10月であった。各入学年および性別における職業未決定状態の人数を比較するため、分析にはSPSS15.0 for Windows 統計ソフトを使用した。

3. 調査内容

(1) デモグラフィック要因

学生の属性を把握するため、性別および入学年度を明らかにした。

(2) 職業未決定尺度

大学生の職業に対する関心の程度を把握するために、下山（1986）が作成した6因子39項目からなる職業未決定尺度を用いた。この尺度は職業未決定状態のあり方に基づいて「自分（もしくはアイデンティティ）」の確立の程度を予測できること、また職業未決定のあり方から、職業へのカウンセリングを行えることが示唆されている（下山, 1986）。各因子の解釈は、以下のとおりである。

混乱：職業決定に直面して不安になり、情緒的に混乱している状態（8項目）

例）「望む職業に就けないのではと不安になる」「職業決定のことを考えると、とても焦りを感じる」

未熟：職業意識が未熟なため、将来の見通しがなく、職業選択に取り組めないでいる状態（7項目）

例）「何を基準にして考えたらよいかわからない」「将来自分が働いている姿が思い浮かばない」

安直：自らの関心や興味を職業選択に結びつけていこうとする努力をしない安易な職業決定態度（7項目）

例）「生活が安定するなら、職業はどのようなものでもいい」「自分がどのような職業に適しているのかわからない」

猶予: 職業決定を猶予して当面のところは職業について考えたくない状態 (7項目)

例) 「せっかく大学に入ったのだから, 今は考えたくない」「できるなら職業決定は, 先に延ばし続けておきたい」

模索: 職業決定に向かって積極的に模索している状態 (6項目)

例) 「やってみたい職業がいくつかあり, 考えている」「今はいろいろなことを経験してみる時期だと思う」

決定: 職業の既決を示している状態 (4項目)

例) 「職業計画は, 着実に進んでいると思う」「職業は決まり, 今は実現していく段階である」

結果

1. デモグラフィック要因

435名の属性を検討した結果, 男子学生が309名, 女子学生が126名であった. 各入学年度における性別の学生数は表1に示した.

表1: 各入学年度における性別の学生数

入学年度	2008		2009		2010	
	男	女	男	女	男	女
人数 (人)	96	35	99	48	114	43

2. 職業未決定状態の検討

職業未決定状態の人数を比較するために χ^2 検定を行った. なお, 職業未決定状態は, 職業未決定尺度による各因子の個人平均を算出し, 最も得点の高い因子を各個人の職業未決定状態とした. 複数因子が同得点であった場合, 下山 (1986) による解釈に従い, 混乱を優先的に選択し, 未熟, 安直, 猶予, 模索, 最後に決定の順に選択することとした.

性別による職業未決定状態の人数比を検討した結果, 有意差が認められた ($p<.01$). 各因子の調整済みの残差を比較したところ, 女子学生は男子学生よりも「決定」状態である学生が多い一方で, 「混乱」「未熟」「模索」状態である学生が少ないことが確認された (表2). 入学年度別による職業未決定状態に有意差は認められなかった.

各入学年度の性別による職業未決定状態の人数は, 多岐の分類により1未満の期待度数が算出されると予想されるため, フィッシャーの直接法 (Fisher's Exact Test) を用いて比較した (出村ら, 2007; 米川・山崎, 2010). その結果, 2008年度入学者 (以後, 3年次生) と2009年度入学者 (以後, 2年次生) に性別による有意差が認められた (表3). 3年次生において, 女子学生は男子学生より「決定」状態にある学生が多くみられた ($p<.05$). 2年次生では, 女子学生は男子学生より「決定」

表2: 性別による職業未決定状態の人数比

N=435	職業未決定状態						N	χ^2	ϕ
	混乱	未熟	安直	猶予	模索	決定			
男子学生	23	68	33	148	11	26	309		
期待値	19.2	60.4	33.4	144.9	8.5	42.6	309.0		
総和%	7.4	22.0	10.7	47.9	3.6	8.4	100.0		
Adj.残差	1.7	2.0	-1	.7	1.6	-5.1		31.051**	.267**
女子学生	4	17	14	56	1	34	126		
期待値	7.8	24.6	13.6	59.1	3.5	17.4	126.0		
総和%	3.2	13.5	11.1	44.4	.8	27.0	100.0		
Adj.残差	-1.7	-2.0	.1	-.7	-1.6	5.1			
計	27	85	47	204	12	60	435		

** $p<.01$

表3：各入学年度の性別による職業未決定状態の人数比

N=435		職業未決定状態					Fisher's Exact Test	ϕ	
		混乱	未熟	安直	猶予	模索			決定
2008年度 入学者	男子学生(96)	6	24	9	46	4	7	12.113*	.322*
	期待値	4.4	21.3	8.1	46.9	2.9	12.5		
	総和の%	6.3	25.0	9.4	47.9	4.2	7.3		
	Adj.残差	1.5	1.3	.7	-.4	1.2	-3.2		
	女子学生(35)	0	5	2	18	0	10		
	期待値	1.6	7.7	2.9	17.1	1.1	4.5		
	総和の%	0.0	14.3	5.7	51.4	0.0	28.6		
	Adj.残差	-1.5	-1.3	-.7	.4	-1.2	3.2		
2009年度 入学者	男子学生(99)	9	23	8	49	4	6	12.775*	.308*
	期待値	7.4	18.9	8.8	49.8	2.7	11.4		
	総和の%	9.1	23.2	8.1	49.5	4.0	6.1		
	Adj.残差	1.1	1.9	-.5	-.3	1.4	-3.0		
	女子学生(48)	2	5	5	25	0	11		
	期待値	3.6	9.1	4.2	24.2	1.3	5.6		
	総和の%	4.2	10.4	10.4	52.1	0.0	22.9		
	Adj.残差	-1.1	-1.9	.5	.3	-1.4	3.0		
2010年度 入学者	男子学生(114)	8	21	16	53	3	13	8.613n.s.	.241n.s.
	女子学生(43)	2	7	7	13	1	13		

* $p < .05$ ※2010年度入学者は χ^2 検定に有意差が認められなかったため、期待値等の下位検定は省略した。

状態にある学生が多く、「未熟」状態にある学生が少なかった ($p < .05$)。2010年入学者（以後、1年次生）の性別に有意差は認められなかった。

考察

本研究は、本学学生の職業に対する関心の程度を把握するとともに、性別および入学年度別による関心の程度について、職業未決定尺度を用いて比較・検討した。その結果、性別では関心の程度に差がみられたが、入学年度で有意差は認められなかった。

結果から、本学では男子学生より女子学生のほうが職業に対する関心の程度が決定状態にある割合が高かった。特にその傾向は、2年次生、3年次生で大きく認められた。

下山（1986）の先行研究では、男子学生より女子学生のほうが職業未決定状態の傾向であると報告しているが、本研究では対立する結果となっ

た。なぜ職業に対して既決状態である女子学生が男子学生よりも有意に多かったか、その理由を本研究から明らかにすることはできないが、いくつかの可能性は考えられる。たとえば、調査の行われた時代背景が影響している可能性が考えられる。女性の平均結婚年齢の上昇、女性参画など、下山が調査を行った1980年代と比較して現代の女性に対する社会的環境や社会的地位は著しく変化し、女性が社会で活躍する機会は確実に増加している。本研究からは社会的背景の変化による影響を明確に言及することはできないが、1980年代に行われた下山の調査と本研究の調査の結果の不一致を説明するために、今後社会的要因を踏まえた検討を行っていく必要があるだろう。また徳永ら（2000）によれば、競技レベルの高い選手は低い選手と比較して決断力に優れていることを報告している。職業に対する関心の程度における決定状態が、決断力として検討できるとすれば、もしか

したら決定状態と競技レベルの2要因間にはなんらかの関係性が認められるかもしれない。今後検討していく必要があるだろう。

本学は、多くの学生が自ら職業を選択し、自己決定した職業に対して満足のいく活動ができるよう、キャリア形成支援室を中心に職業支援していく必要がある。したがって今後とも継続的に学生の職業に対する関心の程度を把握するとともに、どのような要因が関心の程度と関連しているのかを把握していくことが重要であるといえるだろう。

結論

本研究は、鹿屋体育大学生の職業に対する関心の程度を調査し、性別および入学年度別に職業未決定状態を比較した。その結果、職業未決定状態にある学生が女子学生よりも男子学生に多く認められた。また、2年次生と3年次生で、女子学生よりも男子学生にこの傾向が認められた。

文献

- ・ 出村真一・佐藤進・山次俊介・永沢吉則 (2007) 健康・スポーツ科学のための SPSS による統計解析入門. 杏林書院: 東京, pp. 225.
- ・ 藤原正光 (2004) 教師志望動機と高校・大学生活～教員採用試験合格者の場合～. 教育学部紀要38: 75-81.
- ・ 三木ひろみ・三波千穂美 (2010) 体育専攻大学生のキャリアプランニング教育—将来の進路に向けて行動化を促す総合演習の効果—. 筑波大学体育科学系紀要: 47-58.
- ・ 下山晴彦 (1986) 大学生の職業未決定の研究. 教育心理学研究34: 20-30.
- ・ 立木正 (1998) 進路決定の要因に関する研究—保健体育専攻学生の意識調査を通して—. 東京学芸大学紀要5部門50: 139-147.
- ・ 徳永幹雄・吉田英治・重枝武司・東健二・稲富勉・斉藤孝 (2000) スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差, 競技レベル差, 種目差. 健康科学22: 109-120.
- ・ 米川和雄・山崎貞政 (2010) 超初心者向け SPSS 統計解析マニュアル, 統計の基礎から多変量解析まで. 北大路出版: 京都, pp. 17.